

# 堂島米相場 伝達合戦

平成 30 年 9 月 13 日  
S37 繊維工学科卒 北野利男

## 1. 大坂堂島の米市場

人が情報を伝える手段は、言語・身振りから始まり人類の歴史と共に進化した。直立歩行により手が自由に使えるようになったことで道具、そして文字の使用により遠距離への伝達も可能になった。戦争の際などはタイムリーな情報の獲得が勝敗の決するため、矢文、烽火、伝令、忍者等も登場してくる。近世になると商業が急拡大し、言わば経済戦争の様相を呈してくる。

安定的な封建体制が確立した江戸時代には、年貢米を主体とした米の流通が経済の中核を成し、その中心が商都たる大坂堂島の米市場で、そこでの取引相場が全国の米相場の主導的な役割を果たした。元禄時代頃からの米相場情報は、すでに今日の株式市況から想像できる様なシステムとなった。「堂島」について補足すると、地下鉄御堂筋線が出来て本町界限や北浜がビジネスの中心街になってゆく以前は、堂島や四ツ橋筋がビジネス街として優位にあり、特に情報の街として関連深い機関や企業が集中した。例えば、本町へ移る前の大阪商工会議所や、毎日・朝日・産経等の新聞社、IBM・富士通・NTT データなどコンピュータ企業、電通などがある。また CM 発信力で注目のサントリー本社があるのも興味深い。「キタ新地」も近い。

全国諸藩の年貢米は主として堂島で取引されたため、より有利な価格で換金するための戦術を立てる必要があり、日々の米相場を一早く入手しようとした。諸藩のみならず各地の米市場や商人たちは、一刻も早い情報を得るために熾烈な競争をしていた。大坂の米取引の初期は、大商人「淀屋」が今の淀屋橋付近で取引をしていた（淀屋橋南詰に淀屋辰五郎の碑が建っている）が、やがて堂島川北岸に堂島新地が拓かれたため淀屋は、元禄 10（1697）年に取引所を堂島へ移した。享保 15（1730）年になると幕府は「堂島米会所」を発足させ、ここでの相場が全国の基準となった。それまでは現物を取引する「正米取引」だったが、この頃、幕府は財政難から下落した米価の引き上げ策として、帳簿上のみで行う一種の先物取引として「帳合米取引」を公認した。世界初の公営の先物信用取引である。

## 2. 米相場の情報伝達

初期の旗振通信の詳細は不明だが、角屋与三次が挙手信号による暗峠越えの通信事例があるという。（紀伊国屋文左衛門が江戸で色旗を用いて米相場の伝達を行ったという説もあるが不詳）。飛脚は以前からも使われていたが、飛脚業者が組織的に毎日定時に各地に伝えるような、いわゆる「米飛脚制度」は、公認の米会所が出来た少し前頃から盛んに行われていて、幕府もこれを公認していた。安永 5（1775）年になると、幕府は米飛脚を保護するため大坂三郷、摂津、河内、播磨に対してのみ旗振通信禁止の町触れを出している。この事は、この地域に米飛脚制度が確立されており、また「旗振通信」の利用も盛んだったと思われる。その後も何度か旗振通信禁止令が出されているので、非公式ながらも半ば公然と続けられていたと思われる。

もう一つ、旗振通信に対抗した飛び道具的な通信手段として「伝書鳩通信」があった。これは書類筒を鳩の足に結んで飛ばすもので、非組織的でも可能な方法であったが、悪天候や敵（いか-?）による鳩の捕獲等で確実性は必ずしも高くなく、文字通り一か八かの賭けだったのであろう。この方法も旗振通信と同様に米飛脚保護のため幕府に禁止されていた。しかし、過日 NHK の番組「ブラタモリ」を見ていると尾道の国宝浄土寺の屋根裏に沢山の古い鳩小屋があり、住

職の説明では「尾道の豪商たちが堂島米相場を早く知るために、幕府の禁を逃れて伝書鳩通信を行っていた」のだと言う。大寺院の裏側ならバレないとの戦略だったようだ。いつまで続いたかは不明だが、名残りとしてか、この寺には今も沢山のハトが群れていた。

一方、禁制下で行われていた旗振通信は、幕末の慶応元（1865）年9月、英仏蘭米の公使が9隻の連合艦隊で兵庫津に押し寄せた所謂「兵庫開港要求事件」の時、六甲山の旗振通信手が沖合いに現れた艦隊をいち早く発見して、「旗振り」でその急を所司代に報じた事実があり、国防上旗振通信の有用性が認められて禁止令は解かれた。以後旗振通信は盛んに行われ明治政府公認の制度となった。明治初期に「郵便制度」が確立されるが、これは料金の点はともかく、速度では旗振通信はもちろん米飛脚にも当初太刀打ち出来なかった。明治26（1893）年3月大阪に電話が開通する。電話は当初高価で接続に時間が掛ったが、米飛脚も旗振通信も次第に電話や電信に取って代られるようになり、大正7（1918）年に完全に廃れた。

### 3. 米飛脚と郵便制度

「情報」を最も効率よく伝達する機関は「市場」とであると定義したノーベル賞学者(ハエク)がいる。市場では人々に知られていない情報をいち早く掴んで利益を得ようとする。この不断の繰り返しで、市場をして情報の収集・伝達機関たらしめる。江戸時代、堂島や地方市場に、飛脚による相場文書の伝達を業とする事業が発達した。堂島早飛脚として、郵政資料館研究紀要第2号には美濃屋太郎兵衛をはじめ、兵庫米飛脚・石藤、堂島早飛脚・車源の名前が確認できる。18世紀中～後期には、米飛脚を自称する飛脚所が堂島には複数存在し、下表に見るように、ほとんど毎日しかも相場が立つ時刻々々に出発する驚異的なシステムで競い合っていた。

郵政資料館 研究紀要 第2号  
(2011年3月)

|   |                       |                          |                 |                |                   |   |                 |             |          |           |                         |
|---|-----------------------|--------------------------|-----------------|----------------|-------------------|---|-----------------|-------------|----------|-----------|-------------------------|
| 西国筋<br>西国筋早飛脚所<br>大坂堂島渡辺橋角<br>堺屋記次郎<br>出店同所少シ東<br>堺屋佐兵衛 | 年中休日定<br>西国筋<br>米飛脚出所 |                          | 正月<br>四日 五時 十六日 | 三月<br>二日 三時 十日 | 五月<br>四日 五時       | 六月<br>廿五日                                     | 七月<br>十日 廿日 廿六日 | 九月<br>八日 九日 | 十月<br>兩日 | 十一月<br>兩日 | 十二月<br>小月 大月<br>廿七日 廿八日 |
|   | 兵庫灘 毎日出刻<br>九時半定      | 同早便 毎日出刻<br>五時 四時半<br>八時 | 播州路 一円 毎日出シ     | 泉州路 一円 毎日出シ    | 江州路 伊丹 伊勢<br>毎日出シ | 右之外諸方臨時日限時限別仕立何時にても<br>請負差立申候何卒御用向被仰付候様奉願上候以上 |                 |             |          |           |                         |

出典) [(兵庫灘西国筋米飛脚出所年中休日定他)] 三井文庫、高橋2167。

前島密による郵便制度は、米飛脚に客を奪われることを苦慮していたが、政府は「新式郵便之仕法」を布告し「定式急便」を明治4年3月より実施に移すことになる。東京～京都間を72時間以内、大阪までを78時間以内に到達する官営郵便が、公用・私用を問わず、毎日差立てられることになった。

この段階では未だ民間の飛脚問屋は相場が発生する時刻々々に飛脚を出す優位性で、独自に営業を続けていたので、政府も米飛脚を認めざるを得ず、同年5月には準官営とも言うべき位置づけになった。大阪以西については郵便制度が未確立で、近世以来、西国筋への遞送を担っていた米飛脚を評価し、彼らに郵便規則に準拠した運賃で、相場以外も営業させることにより、官営郵便が西国筋を押さえる際の礎にしようと考えた。そして明治6年に、西国以外の民間飛脚問屋による一般手紙の遞送を禁止し、官営郵便による手紙の独占体制が確立する。

米相場に限定された「米飛脚」は依然として例外的に、その後も継続が許された。

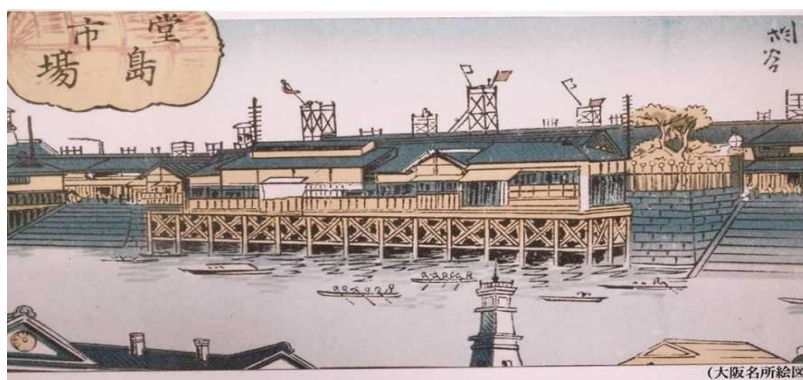
#### 4. 旗振通信について

飛脚では翌日以後に届く相場情報が、旗振通信が本格化した 1840 年代以降には、地方の市場も同日中に大坂米価と連動出来るようになった。例えば京都では、大坂と大津の価格を比較し、より安い価格をつけている市場から米を購入したという。

旗振通信の方法は、いろいろあったようだが一例として、旗を振る位置・回数・順序に意味を込めて情報を伝えた。単純なものは旗を振る向き（前後、手の左右）と、桁別に回数で数字を伝えるというものだが、第三者に通信内容を知られてしまうリスクがある。複雑化したものとして以下のような方法があった。（上げ相場：左横上で二振、下げ相場：右横下で二振、1 銭：右横斜下、2 銭：右横、3 銭：右横上下二振、4 銭：右横斜上、5 銭：直立・・・など。）通信方法に間違いがないかどうかを確認するために、予め決めておいた数をあわせて通信した。また、他人が盗み見ることへの対策として、旗で通信する数字を実際よりも増減させることを、日によって予め決めておき、他人が盗み見しても役に立たないようにしたらしい。

須磨の旗振山(鉢伏山の北、垂水区・須磨区境界の山)で行われていた方法については、初期の記録は残っていないが、望遠鏡が出現してからの通信方法は、たたみ半畳ほどの大きさの布を振って通信開始を呼びかけ、大きな紙または板に文字を書いて次の旗振り場に示す。次の旗振り場ではそれを望遠鏡で読み取り、また次へ書いて知らせる方法が採られていたと言われる。その場合でも、手旗方式が一部共用されていたと思われる。

堂島の米市場では公式には書簡で、専門の「米飛脚」を利用していたが、「旗振通信」を行うための櫓も設けられていて、幕末以後は、堂島の速報価値を誇るためにも旗振通信が盛んに行われていた。堂島の建物屋上の櫓から第一の中継ポイントへ伝達した。中継ルートや中継点は必ずしも一定ではなかったが、例として柴田の研究（注 1）と、新聞報道を引用する。

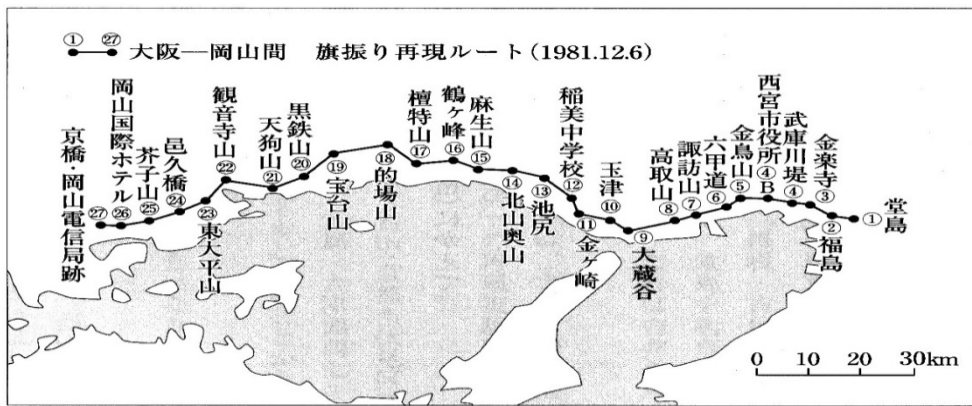


明治期に利用された旗振場の間隔は、調査した例では、1 里から 5 里半、平均すれば 3 里（12km）とされている。伝承されている大阪一地方都市間の通信所用時間と旗振り場の平均的な間隔からすれば、送信 1 回の

所要時間は約 1 分、通信速度は平均時速 720km となる。送信の頻度については地域差があるが、1 日に 5～10 回が平均的とされている。伝達所用時間は、堂島から和歌山へ 3 分、京都まで 4 分、大津まで 5 分、神戸まで 6 分、広島まで 40 分だったと言うことで、いま考えても驚くべき速さだった。

#### 5. 旗振通信網の例

堂島米市場の制度が確立されるにつれて旗振通信網も整備されていった。その通信網のルートは諸説あるが、一例として下図がある（文献、注 1）。但し、これは昭和 56 年 12 月の TV 再現実験時に仮設的に用いた中継ルートで、神戸付近はスモッグ等で正しく再現できていない。岡山まで昔 20 分で届いたところを、神戸の街を無線でつないでも 2 時間以上掛ったと報じられた。須磨の辺りは上記実験ではパスされているが、本来須磨を経由するルートは播州、備州、芸州から九州にも及び、また、分岐して淡路島から徳島方面へも伝えられたという。言うまでもなく堂島からの通信網は全国に伸び、京都から近江方面、伊賀・伊勢・遠州・駿河方面、紀



右図は S 56 年、堂島—岡山間総距離 167km を 27 中継所を設け西宮の大学生ボーイスカウト等による再現実験の新聞報道より

州方面へと伸びていた。現在須磨の旗振山ほど有名ではないがルートと推定される山名が各地に現存する。例えば、交野市の旗振山や野洲市の旗振山も名が残っている。また、相場振山、相場山、旗山、畑山などの名が残る山も、むかし旗振通信が行われた山だったと言われる。

## 6. 須磨の旗振山について

須磨の旗振山は摂津と播磨の両国に跨った 253m の山で、昭和 6 年創業の「旗振茶屋」があり、今も旗振山の山名を印象付けている。この山は神戸毎日登山のメッカで、旗振署名所があり、また六甲全山縦走路の西の拠点の山としても知名度は高く、ハイキングの名所でもある。山陽電鉄が営むロープウェイ、カーレータ、リフト、回転展望閣、梅林や山上遊園地などあり幅広いレジャーの山である。展望は抜群で、古代には大宰府との連絡のための狼煙台があったという説もある。旗振りではないが旧本四架橋公団、県防災関連、NHK 等 8 基のマイクロウェーブの巨大アンテナによる通信基地がある。但し今は衛星通信に主役を譲り予備的設備となったが、昔も近年も通信網の十字路であった。歴史的な地図には鉢伏山(神功皇后伝説)・鉄拐山(平家物語一ノ谷の合戦の段に)は載っているが、それより高い旗振山の記載がない。旗振通信が行われるようになった江戸中期以降に注目されて山名がついたのであろう。

郷土史家の調査によれば、明治末期から大正初めの頃の一時期、須磨の旗振中継の山は旗振山ではなく、その北東 2km にある梅尾山 274m だったという。その人による聞き取り調査では、多井畑に住んでいた旗振り人が、毎日弁当を肩にかけ梅尾山に登っていたという話や、子どもの頃、梅尾山で旗振り用の据え付け望遠鏡をのぞかせてもらったという証言もある。明石では朝霧駅北方の大蔵谷字畑山で須磨旗振山からの旗振信号を受けていた話や、また魚住町の金ヶ崎山では高取山からの旗振信号を受けていた話が昭和 30 年代の新聞に載っていた。

(新聞記事中、大蔵谷では「旗振りさん」が毎日旗を持って畑山へ出かけていた話があり、また、魚住町金ヶ崎では「旗振りさん」が経営していた旅館は使用していた望遠鏡に因み「めがねや」という屋号だったという。)

明治末期以後、須磨旗振山の話よりも、梅尾山の方が浮かび上がってくる理由として、私は、当時須磨浦一体が御料地になり、賀陽の宮の別邸も出来て、旗振山がその境界地になったため、御料地の頭の上で米相場の旗を振るのを憚った可能性がある。近くの武庫離宮(現須磨離宮公園)の造営とも関係があるのではないかと考えている。旗振通信を担う人々は少人数で秘密を守り、かつ情報盗人や妨害者と戦う孤独な存在だっただけに記録はほとんど残っていない。元々米相場の旗振通信が江戸時代に違法行為だったことも有り、その歴史は無意識的に消されてしまったようにも思われる。しかし、大事な役割を担った記念すべき名前を冠した山として、後世に云い伝えられるだけでも限りなく気高い山のような気がする。

【参考文献】

- ① 「近世日本における相場情報の伝達」 高槻泰郎 郵政資料館研究紀要第2号 (2011年3月)
- ② 『旗振り山』 柴田 明彦 著 ナカニシヤ出版 2006 (注1)
- ③ 『図説・大阪府の歴史』 津田英雄 編 河出書房新社 1990



摂津・播磨を分かつ六甲山系最西端の山並み



その見晴らしの良い位置に旗振り山がある



創業 95 年の「旗振り茶屋」や電波塔がある



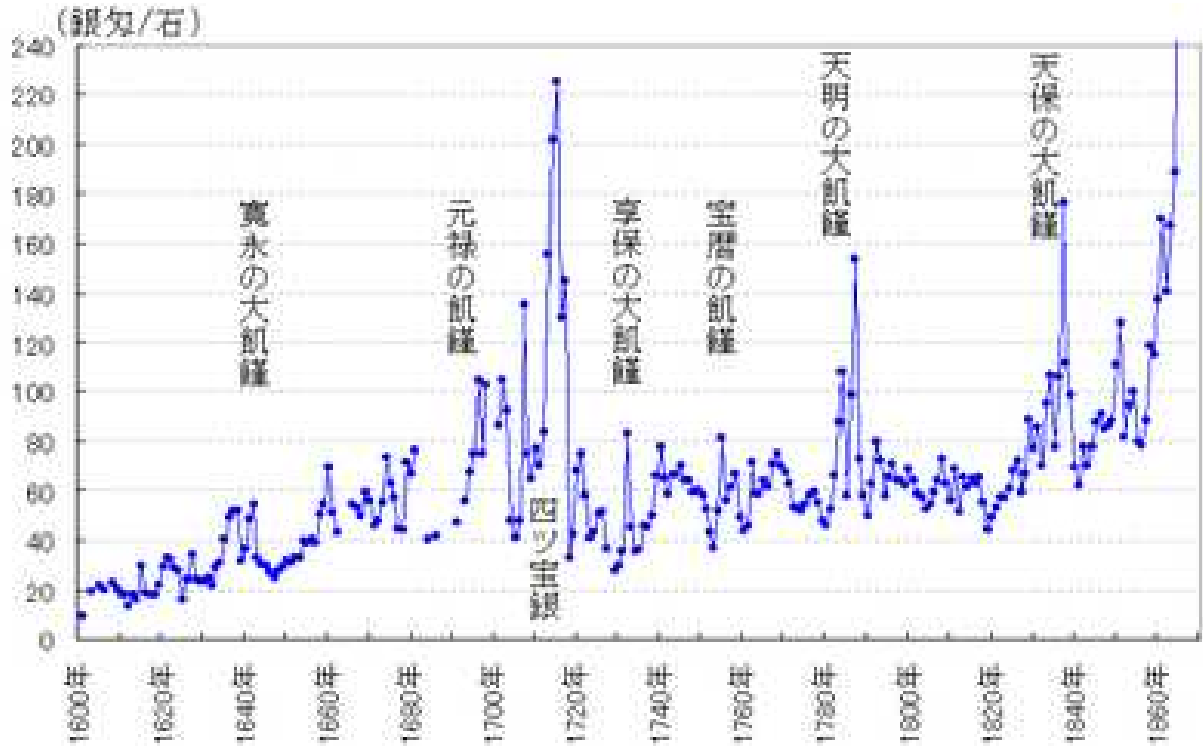
尾根筋には「宮」印の宮内庁境界標が残る



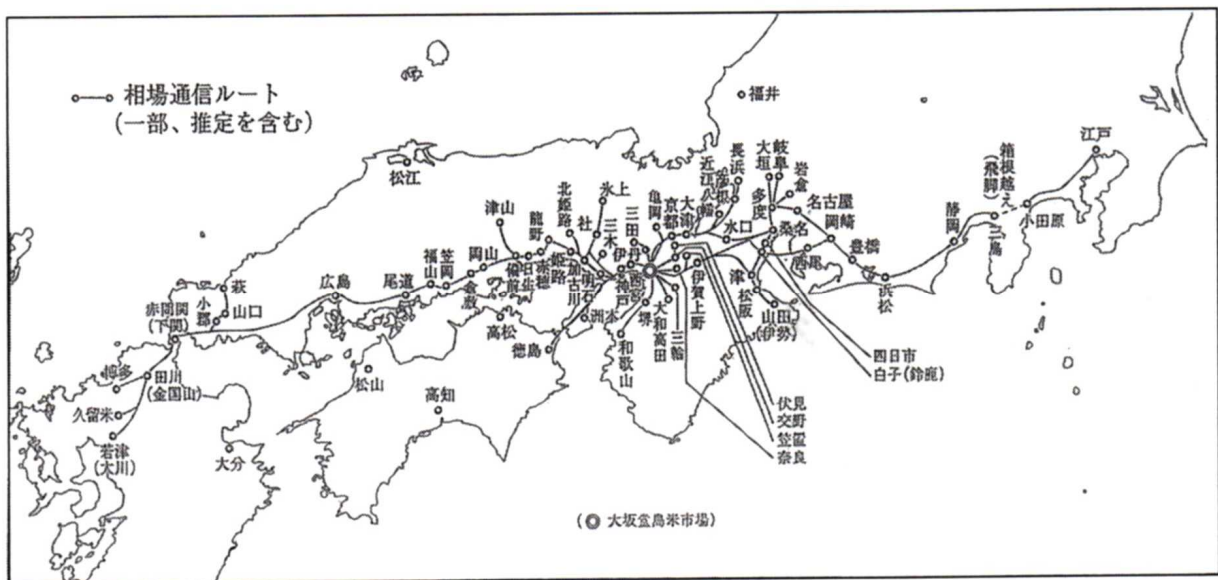
旗振り山から東を見ると須磨海水浴場と大阪方面



西を見ると垂水、海峡大橋と淡路島が眼下に。



江戸時代の米相場の推移、幕府が低迷した米相場の引上げを目論んで「堂島米会所」を発足させた享保 15（1730）年。しかし図らずも、その翌年には享保の大飢饉が起きて米相場は暴騰してしまった。相場が上がっても米不足で幕府は当惑し、庶民は悲惨な状況になった。



参考文献②の「旗振り山」の記載されている米相場通信のルート推定図。